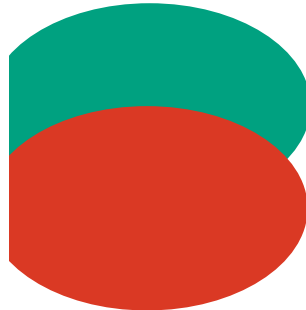


# 20180330

## 絵本学会 NEWS No.60

発行：絵本学会  
発行日：2018年3月30日  
編集：絵本学会広報委員会  
絵本学会事務局：〒164-8676 東京都中野区本町2-9-5  
東京工芸大学 芸術学部 陶山研究室気付  
E-mail office@ehongakkai.com  
http://www.ehongakkai.com



絵本学会

第21回絵本学会大会開催のお知らせ  
第2回日本絵本研究賞報告  
2017年度絵本研究報告  
選挙管理委員会より  
紀要『絵本学』第21号投稿論文募集  
絵本学会理事会議事録

## — 第21回絵本学会大会(6月2日・3日 札幌大谷大学) 開催のお知らせ — 大会テーマ：多様化する絵本

★ 期日：2018年6月2日(土)・3日(日)

★ 会場：札幌大谷大学短期大学部  
〒065-8567 札幌市東区北16条東9丁目1番1号  
電話 011-742-1651  
地下鉄  
東豊線「東区役所前」駅下車2・3番出口から徒歩7分  
東豊線「環状通東」駅下車1番出口から徒歩7分  
中央バス  
東17北光線「大谷学園前」下車徒歩5分  
東19北光・北口線「大谷学園前」下車徒歩5分  
http://www.sapporo-otani.ac.jp

★ 参加費：会員・準会員(院生など) 1,000円、学生 500円  
一般 2,000円(一日のみ参加の場合 1,500円)

★ 交流会会費 5,000円 / 2日目昼食(事前申込制) 1,000円

★ プログラム(予定)：

### 第1日目 6月2日(土)

12:00～ 受付  
13:00～ 開会式  
第2回日本絵本研究賞報告  
13:20～ 基調講演「地球はどうぶつがいっぱい  
—絵本ができるまで」あべ弘士(絵本作家)  
14:50～ 「ふきのとう文庫設立について」  
高倉嗣昌(ふきのとう文庫理事長)  
15:30～ 研究発表  
17:40～ 第21回絵本学会総会  
19:00～ 交流会(会場：学内カフェ)

### 第2日目 6月3日(日)

9:00～ 受付  
9:30～ 研究発表  
11:30～ 作品発表  
12:30～ 休憩  
13:30～ ラウンドテーブル  
A「保育現場より～保育の中で広がる絵本のいろいろ」  
コーディネーター：増山由香里(札幌国際大学短期大学部)  
B「いわさきちひろと武市八十雄の絵本づくり」  
話題提供者：松本猛(ちひろ美術館常任顧問)  
武市晴樹(至光社代表取締役社長)  
山口恵子  
コーディネーター：横田由紀子(札幌大谷大学)  
C「ようこそ、自然へ! 絵本画家が語る体験としての自然」  
話題提供者：あべ弘士(絵本作家)  
村上康成(絵本作家)  
コーディネーター：横田由紀子(札幌大谷大学短期大学部)  
15:40～ 閉会式

第21回絵本学会大会実行委員会事務局(お問い合わせ先)  
札幌大谷大学短期大学部保育科 横田由紀子研究室  
メールアドレス: yukiko\_yokota@sapporo-otani.ac.jp

★ 正式な大会案内は4月下旬に郵送にてお届けする予定です。

★ 宿泊は参加者各自でお早めにご手配されますようお願いいたします。

## 第2回日本絵本研究賞について

「日本絵本研究賞」は2017年、絵本学会設立20周年を機に「日本絵本賞」を主催している毎日新聞と全国学校図書館協議会の協力を得て、絵本に関する優れた研究論文や評論を顕彰する目的で設置されました。

### ●第2回日本絵本研究賞選考委員会を終えて

今年度の論文の応募状況は昨年のお応募数より若干増加となり、特別委員会では選考規則に基づき、6編の論文を決定し、選考委員会へ推薦を行いました。

2月1日に開催された同委員会では、日本絵本研究賞規則第4条2項にしたがって全委員による互選の結果、満場一致で三宅興子委員が選考委員長に選出されました。委員長の司会進行により審議が進められましたが、今回の応募論文の特徴として、絵本研究が関連領域にまたがり、絵本学会の枠を超えて研究の裾野が広がっているという状況が見られました。それと同時に選考の難しさを痛感させられました。選考過程の議論においては、「絵本とは何か」という基本的な概念を問い直すことを再認識することとなり、絵本研究におけるキーワードの見直しも今度取り組むべき課題として明らかになりました。こうしたさまざまな議論を経た結果、委員全員の合意によって第2回日本絵本研究賞と奨励賞が決定いたしました。

同委員会からは、学会に対して第3回募集に向けた「日本絵本研究賞」がさらなる絵本学研究的の発展に資するよう、また、賞の継続性を促すさらなる積極的な活動に着手すべきであるとの要望が出され、第2回選考委員会を終了しました。

(報告：絵本学会特別委員会委員長 本庄美千代)

### ●第2回日本絵本研究賞選考委員会

日時：2018年2月1日(木) 午後1時より

場所：毎日新聞本社5階 506会議室

### ●選考委員 (○は選考委員長)

今井良朗 (武蔵野美術大学名誉教授、元絵本学会会長)

駒形克己 (グラフィックデザイナー、造本作家)

澤田精一 (元福音館書店編集者、絵本学会理事)

### ○三宅興子 (英国児童文学研究者、梅花女子大学名誉教授、元絵本学会会長)

本庄美千代 (武蔵野美術大学非常勤講師、客員研究員、絵本学会理事、日本絵本研究賞特別委員会委員長)

設楽敬一 (公益社団法人全国学校図書館協議会 理事長)

小島明日奈 (毎日新聞社執行役員 東京本社教育事業本部長)

### ●第2回日本絵本研究賞受賞者・論文表題

受賞者：磯辺菜々

受賞論文名：「絵本に描かれる『友情』イメージと友情至上主義の社会学的分析」

\*受賞論文は「教育・社会・文化：研究紀要」17号(京都大学大学院教育学研究科教育社会学講座)で発表された。

### ●第2回日本絵本研究賞 奨励賞受賞者・論文表題

受賞者：児玉茜

受賞論文名：「現代アーティスト元永定正の初期の絵本作品群」

\*受賞論文は絵本学会紀要「絵本学」No.19で発表されたもので、本紙での再掲は割愛する。

以上

第2回日本絵本研究賞受賞論文

## 絵本に描かれる「友情」イメージと友情至上主義の社会学的分析

磯辺 菜々

### A Sociological Analysis of the Image of Friendship and Friend Supremacism in Picture Books

Nana ISOBE

#### 1. はじめに

「つながり」や「絆」がもてはやされる昨今、「友情」への注目が集まっている。FacebookをはじめとしたSNSでは、友だちの数や交流の様子がつねに可視化されるようになった。また、「友だちの数で寿命はきまる」(石川 2014)といった友だちの効用を説く本や、「友達力」で決まる！一子供の「人間関係力」を育むために、親にしかできないこと一(親野 2007)のように親を対象とした本、「友だちが増える話し方のコツ」(西出 2009)をはじめとした子ども対象の友だちづくりノウハウ本などが多数出版されていることから、現代社会における「友情」への関心の高さがうかがえる。

それではそもそも、社会において「友情」とはどのようなものとしてイメージされているのだろうか。本稿では、絵本に表される子どもの「友情」イメージを抽出し、またそこに反映される大人の側の願望やねらいに迫ることを目的とする。

2節では、「友情」に関する哲学的議論や社会学的研究の流れを追い、分析の観点を整理する。3節では、友だちをメインテーマとして扱っている絵本の分析を通して、子どもの「友情」の描かれ方の特徴や、そこに込められたメッセージを詳しく見ていく。4節では、絵本における「友情」のイメージ提示がどのような意味を持っているのかを考察し、5節では総括的なまとめを行う。

#### 2. 「友情」の分析視角

##### 2.1 「友情」に関する議論

「友情」とは、古代より大きな興味を惹きつけてきたテーマといえる。しかし、「友情」は制度化されない個人的なものと考えられるがゆえにさまざまに解釈され、明確な基準や定義を設定することが難しい。ここでは、「友情」についての議論の簡単な系譜を示す中で、「友情」という概念に含まれる様々な要素を見る。

##### 2.1-1 「友情」の哲学的議論の系譜

現代の社会における一般的なイメージとして、しばしば「友情」は、そのまま「親密さ」の問題だと見做されがちであるように思われる。しかし、古代から哲学者や思想家たちによって語られてき

た友情論には、様々な見方が存在する。アリストテレスは『ニコマコス倫理学』において、友情はひらかれた社会的空間において共に議論をする中で育まれるものと述べ、意見や利害の一致などは友情の本質ではないとした(Lucrece, 1948=2014)。またキケロも『ラエリウス』において、友情はあくまで公的なものだとし、かつ友情の本質は親密な雰囲気や連帯感、一体感ではないと主張している(Cicero, 1990=2004)。それに対しモンテーニュは、『エセー』の「友情について」において、友情はあくまで閉じた私生活の内部において生じるという立場をとり、宿命によって結ばれた2者が「分身」のごとく2人で1つになるものが友情だと考えている(Montaigne, 1922=1965)。またJ・ルソーは『エミール』において、アリストテレスやキケロとは対照的に、閉じた2者間で生じる親密な雰囲気、利害や意見の一致にもとづく助けあいこそが友情の本質的な要素であるとしている(Rousseau, 1969=1978)。このように、愛着や親密さが友情の本質か否かが重要な論点となってきたが、ここにI・カントは、友情において「愛」だけでなく「尊敬」という新たな要素を導入し、友情論に新しい見方をもたらした。「友情(中略)とは、2つの人格が相互に等しい愛と尊敬とによって結合することである。(中略)愛は引力、尊敬は斥力とみられるのであって、前者の原理は接近を命じ、後者の原理は相互に適当な距離をおくことを求める」(Kant 1797=2002: 360-361)。

##### 2.1-2 「友情」の社会学的議論の系譜

他方、社会学者によっても友情や絆が考察されてきた。F・テンニースは、「信頼にみちた親密な水いらすの共同生活」(Tönnies 1887=1977: 35)を営む共同体において、精神的な紐帯によって結ばれる親密な関係を「朋友」と呼んでいる<sup>1</sup>(Tönnies 1887=1977: 52-53)。またG・ジンメルは、生活が様々な分化した現代人にとって、全人的な交わりによって「絶対的な心からの親密さ」(Simmel 1908=1994: 366)をめざすという伝統的な友情は困難であるとして否定した。そして、対人関係において、距離を保つための「遠慮」や「秘密」という社会学的形式の重要性を主張した(Simmel 1908=1994: 367-371)。そしてG・アランも、一心同体をめざす親密な友情観は最高理想にしかすぎず、社会学的見地からすれば極端であると否定している(Allan 1989=1993: 20)。加えて、友情という概念は関係性の種類も及ぶ範囲も多様であることをふまえ、広い角度から検討する必要性を主張した(Allan 1989=1993: 21-22)。さらに、友情の本質は「平等性」にあるとし、「友情のうちにあっては、友人たちは、(中略)互いを平等に扱い、自分たちの関係の中では全般的に互酬性があり等価交換のなされていることを確信している」と述べている(Allan 1989=1993: 30)。そして、関係における互いの平等性が友情の中核であるからこそ、多くの友情は同じような経済的・社会的位置を占める同質的な人々の間において生まれやすいと説明した(Allan 1989=1993: 34)。

まとめると、友情に関する議論全体を通して、「平等性・対等性」

が友情の前提となっており、力の釣り合った互酬的な関係が友情の基本的関係として想定されている。また、友情の理念に関しては大きく分けて2つの立場が存在する。友情において、同質性を軸にして親密かつ一心同体な結びつきを志向するものと、異質性を軸にして友だちとの間にある程度の距離を置くことを重要視するものである。このように様々な友情の理念型が語られてきたが、これらは成人同士の友情を前提とした学者たちによる議論だった。それでは、子どもにはどのようにして「友情」が示されるのだろうか。子どもに提示される「友情」理念を追うことは、社会においてイメージされている「友情」にせまる手がかりになると考えられる。先述した対等性、親密さ、距離感などといった観点をふまえながら、子どもの「友情」はどう描かれるのかに関して、子ども向け絵本を対象として分析していきたい。

## 2.2 本稿の課題

本研究では、主に幼児期から学齢期の子どもにおける、個人と個人、または集団における個人間の「友情」の概念はどのようなものであるかを調べる。ここでは、現実における子ども同士の個々の実際的な関係性<sup>2</sup>ではなく、大人たちがイメージとして語る子どもの「友情」に着目する。このために、子ども向けの絵本を調査対象に選び、「友情」のイメージに関する描写の分析を行なった。絵本を対象にする意義としては、絵本が子どもの学びや発達に大きな影響を与えうる媒体であること<sup>3</sup>、また絵本にはしばしば社会の価値観が反映されること<sup>4</sup>が挙げられる。アリエスが指摘した近代的な子ども観（Aries 1960=1980）をふまえると、子ども向けの絵本には、大人と区別された「子ども」に対する大人たち自身の期待や思い、葛藤などが色濃く反映されているといえる。そのような重要な表象媒体として絵本を捉え分析をした先行研究としては、山名淳の研究が挙げられる（山名 2012）。山名は、子どものしつけの問題をめぐる大人たちの葛藤や社会の様相を、絵本の中に丹念に読み込んでいる。本稿では、絵本において描かれる「友情」の中に、社会における子どもの「友情」イメージだけでなく、そこに映しだされている大人の側の期待や思いも読み解きたい。

また、これまでに、絵本において「友情」がどのように扱われているかを具体的に分析した研究もいくつかある<sup>5</sup>が、子どもの発達における友だちの重要性を確認するにとどまるものがほとんどである。それに対し本稿では、複数の視点や分析軸を用いて子どもの「友情」イメージを分析的に捉えることを試みる。

## 3. 絵本に描かれる「友情」

### 3.1 調査の対象と分析方法

#### 3.1-1 資料の選定

調査に際しては、京都府のこどもみらい館子育て図書館所蔵の絵本を対象とした<sup>6</sup>。就学前後の子どもを主な対象とする物語絵本のうち、「友情」や友だち関係がメインテーマとなるもの（以下「友だち絵本」と表記する）を選出するにあたり、以下の二段階の作業

をおこなった。

まず、本のタイトル中に「ともだち」「おともだち」が含まれるものをピックアップしてリストを作成した。これによって選出された作品は、1970–2010年代出版の絵本計146点である。この年代別出版点数の内訳は、70年代3点、80年代11点、90年代25点、2000年代87点、2010–2015年21点であった。このうち、友だち絵本の出版点数が圧倒的に多い2000年代以降発行の作品計107点に限定することとした<sup>7</sup>。

さらにここから、創作作品ではないもの（昔話・伝記など）や、「ともだち」という用語を「人格をもった、親しく交流する存在」という意味で用いてはいないもの（「しぜんはともだち」など）を除外した結果、対象となる絵本は91点にまで絞られた。これらの中に描かれる「友情」のイメージを取り上げることとする。

### 3.1-2 分析の視点

分析に際しては、友だち絵本における全体的な特徴と、「友情」のパターンについての類型的な分析という2つの観点で見ることとした。類型的な分析の段階においては、物語構造と、自己と他者の距離感に着目した。

### 3.2 全体の特徴

はじめに、友だち絵本における「友情」の描かれ方の全体的な特徴を述べる。

#### 3.2-1 友情至上主義と「ひとり」イメージ

ほぼ全ての友だち絵本では、友だちといることの絶対的、肯定的な価値が強調される<sup>8</sup>。「みんなであそぶとたのしいね！」と語ったり、元気のなかった主人公が友だちと遊ぶことで笑顔を取り戻すといった描写を通して、「友情」の絶対的効用が示される。本稿では、このように「友情」に絶対の価値を置く見方に対し「友情至上主義」という言葉を用いることとする。ここで特筆すべきは、「友情至上主義」はたいてい、「ひとり」蔑視とセットになっていることである。例えば、友だちのいない「ひとり」の状態の主人公は、たいてい猫背やうつむきがちでさみしげな表情をし、薄暗い穴ぐらや部屋の隅などにひとりで座り込んでいる。そのような状態に対し「ひとりぼっち」という言葉が用いられることも多く、主人公は「いつもとてもさみしく」（A）感じたり、「とじこめられてるみたいでくらしい」（B）という感情を語る。そして「だれかともだちになってくれないかなあ。だれでもいいから」（C）と友だちを切実に欲するのである。また、こういった「ひとり」の状態は本人の性格上の問題に帰属されることが多く、「他者を怖がる」、「恥ずかしがり・引っ込み思案」、「自己中心的」などの特徴が描かれる。そして主人公は、自らの気づきと努力を以てこれらの性格を克服してはじめて、友だちができて笑顔になるのである。

#### 3.2-2 登場人物の擬人化

続いて、「友情」を構成する登場人物の特徴について着目する。「友

情」の構成員が、人間のみの場合、動物・無生物（月や雪だるまなど）のみの場合、人間と動物・無生物混合の場合で分け、なおかつ、その中で男女の区別はいかになされているかを調べた<sup>9</sup>。その結果が表1である。

表1 友だち絵本における登場人物の構成

	人間のみ	動物・無生物のみ	人間と動物・無生物混合	計
男のみ	1	15	5	21
女のみ	1	1	2	4
男女混合	7	24	7	38
性別不明	0	23	5	28
計	9	63	19	91

大きな特徴として挙げられるのは、絵本においては実際の人間の子どものうしの「友情」ではなく、動物どうしの「友情」が圧倒的に多く描かれるということである。これは、登場人物を動物や無生物に置き換えることによって、ジェンダーや人種、その他様々な特質を捨象することができるからだと考えられる。

### 3.2-3 ジェンダーをこえた「友情」

ジェンダーに関する描写には、次の2点の特徴が挙げられる。1点目は、先述したように登場人物を動物や無生物に置き換えることで、性別の違いを意識させないようにしているということである。2点目は、人間のみ、動物・無生物のみ、もしくは両者混合の登場人物の場合すべてにおいて、男女混合型の「友情」が一番多く描かれるということである。これは、男女どちらかに偏らせずに「友情」を描くことで、男女平等の意識や、男女の区別なく仲良くすることを教育的メッセージとして込めているためだと推察される。

このように、「友情」を描く友だち絵本においては、登場人物を動物や無生物に置き換えることで性別を意識させにくくしたり、男女混合の「友情」を多く描いたりすることによって、ジェンダーによる違いが明確化されないような工夫がなされていることがわかった。

### 3.3 それぞれの「友情」の特徴

次に、様々なパターンの「友情」について、比較しながら特徴を述べていく。

#### 3.3-1 「友情」の類型

絵本に描かれる「友情」を見ていくと、関係性においていくつかの特徴が浮かび上がってくる。まず、2.1において先述したように、哲学においては同質性が「友情」の議論における1つの軸となってきたが、絵本においても同質性に基づく親密な関係が非常に多く描かれていることが見受けられた。例えば、友だち同士見た目や行動もそっくりでまるで双子であるかのように描かれたり、外見は違っていても感じ方や価値観といった内面が似ていることが強調される。また、それとは対象的に、互いの見た目や価値観などが全く異なるという点をあえて重視する作品も、少数ながら見て取れた。加えて、描かれる友だち関係の範囲にも着目することができる。主人公ともう1人の親友との絆を描くものもあれば、近所の4,5人のグループで遊ぶ様子や、保育園のクラスなどひとまとまりの集団

内で仲良く生活する様子を描くものがあった。

以上から、友情を捉える際には、2つの視点があるといえる。1点目は、友だちとの関係性において、同質性を軸にするものと、異質性を尊重するものである。2点目は、「友情」の成立範囲が特定の関係に閉じられているもの、または外部へと開いているものである。これらに関して、本稿では以下の用語を用いる。「友情」において同質性を軸にするものを「融合型」、異質性を尊重するものを「自律型」、また関係が内部に閉じているものを「内部収束型」、外部へと開くものを「外部拡大型」と名付ける。これらを用いて、図1のように類型化した<sup>10</sup>。

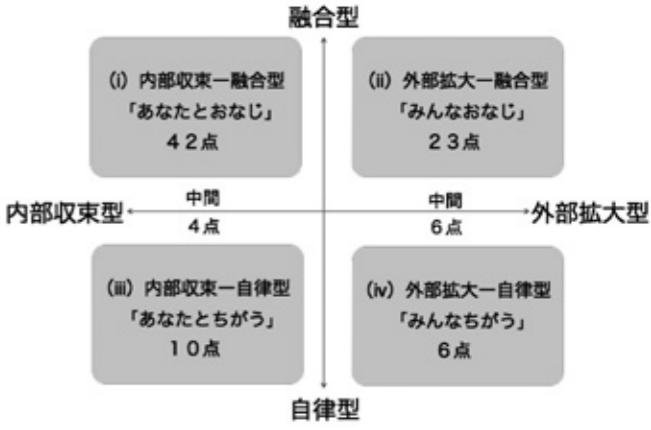


図1 「友情」の類型

(i) の内部収束—融合型は、何でも分かり合いいつでも一緒に行動するというような、2者間における心身の距離の近さや同質性が関係の核となる。代表例としては、『たったひとりのともだち』(D)が挙げられる。孤独なカラスと少年が、互いをたったひとりの理解者としてみなし、共に心を通わせ合い、「きみはぼくのたったひとりのともだちだよ」と承認しながら、深く緊密な関係を築いていく。

(ii) の内部収束—自律型は、友だちとの距離の近さや同質性は志向せず、「離れていても思い合う」といった情愛と信頼の深さが「友情」のしるしとなる。また意見対立の際には友だちの意思を尊重する様子が描かれる。代表例としては、『ムーミンのともだち』(E)がある。異質な環境に住み異質な意見を持つなど、ムーミンとその友だちスナフキンの間における異質性が描かれ、それを承認・尊重することが「友情」の軸となる。

(iii) の外部拡大—融合型では、大勢で協調してあそぶことに価値が置かれる。代表例としては、『ともだちいっぱい』(F)が挙げられる。保育園児たちが「ともだちのともだちは、ともだち」を掲げて「友情」を容易に拡大しながら、みんなで一緒に同じ遊びをする様子が描かれている。

(iv) の外部拡大—自律型では、さまざまな個性を持った集団が、互いの違いを受容・尊重しながら共存する関係が描かれる。代表例としては、『エルマーのともだち』(G)がある。ゾウやネズミやライオンなど見た目も性格も違う様々な登場人物たちが、互いの個性を認めながら仲良く暮らす。

このように、絵本に描かれる「友情」パターンは四類型に分けることができ、それぞれの数は (i) 内部収束・融合型が 42 点、(ii) 外部拡大・融合型が 23 点、(iii) 内部収束・自律型が 10 点、(iv) 外部拡大・自律型が 6 点であった。

### 3.3-2 日本作品と欧米作品における「友情」の描かれ方の違い

今回分析対象とした 91 点の絵本のうち、日本作品は 53 点、翻訳された欧米作品<sup>11)</sup> は 38 点であった。両者における 4 類型の割合は図 2 のとおりである。

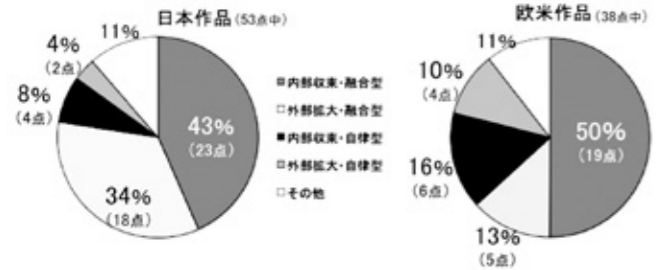


図 2 日本・欧米作品における 4 類型の割合

両者の共通点としては、2 者間での親密な「友情」を描く「内部収束・融合型」が日本・欧米ともに 43%、50% と、4 つの中で突出して多いことである。また、その中で「ずっといっしょ」「なんでもわかりあう」といったことを前提とするなど、親密さの志向もよく似ている。このことから、日本・欧米ともに、内部収束・融合型が「友情」の基本形となっていることがわかる。

相違点としては以下の 2 点が挙げられる。1 点目は、日本作品において、個人が複数人と親密になる「外部拡大・融合型」が 34% と、欧米の 13% に比べ非常に多く、また内容にも違いがあることである。日本作品では、個人が保育園や小学校など特定のコミュニティ内に協調的に溶けこんでいく物語が多く見られるが、欧米作品にはそのようなものは 1 点を除き見当たらなかった。欧米作品では、保育園や学校といった日常生活の外界へと出て行く中で、主人公が複数の個人と関係を取り結んでいく様子が多く描かれる。

2 点目は、欧米作品において、異質性を尊重する「自律型」が比較的多いことである。図 2 によると、「内部収束・自律型」は日本作品 8% に対し欧米作品は 16%、また「外部拡大・自律型」は日本作品 4% に対し欧米作品は 10% と、欧米作品の方が比較的多い割合で描かれていた。

2 者間の内部収束型にせよ、複数人の外部拡大型にせよ、友だち同士の個性や意見の違いといった異質性を積極的に認める関係性は、欧米作品においてより多く提示されるのである。

これら 2 点の相違点は、日本と欧米における個人の意識の違いを反映していると考えられる。日本作品に「みんないっしょ」の外部拡大・融合型が多く見られたのは、日本の共同体を重んじる意識を反映しているからではないだろうか。「保育園でみんなとなかよくしてほしい、溶け込んでほしい」という我が子のスムーズな社会化を願う親の願いが表れているといえる。

これに対し、海外、特に西洋においては、あらゆる民族・宗教集団が存在し時に対立してきたという背景に加え、個人の尊厳を重んじる近代的な個人主義が根付いていると一般的に言われる傾向がある。だからこそ、友だちどうし異質な他者として個性や意見の違いを認め合う自律型の友情が、海外の絵本に多く描かれたのだと考えられる。

実際、R・ベネディクト (1946=2008) や G・クラーク (1979) からも、欧米人は主義主張や信仰を重んじるのに対し、日本人は身近な人間関係や「世間」を重視するという特徴的な違いを指摘している<sup>12)</sup>。このような議論で示される文化的傾向が、絵本においても一部示されるかたちとなった<sup>13)</sup>。

### 3.4 各類型の特徴

次に、3.3-1 で述べた 4 類型について、それぞれ詳細に検討していく。ここでは、「物語構造」を追っていきながら、「自己と他者の距離感」について見ていった。「自己と他者の距離感」を分析するに際しては、「引力」と「斥力」という観点に着目することとしたが、これは 2.1-1 で先述した、友情を「愛という引力と尊敬という斥力の均衡関係」だと捉えるカントの考えを援用したものである。本稿においては、「愛や愛着を軸とし、互いを一体のものとして距離を縮める力」を「引力」、「尊敬や尊重を軸とし、互いを異なるものとして離す力」を「斥力」と定義する。本節では、特定の友だちとの関係が築かれる空間である「内部」と、友だちではない他者が存在する空間である「外部」のそれぞれに対し、「引力」と「斥力」がどのように作用しているのかを読み取ることを試みた。それぞれの類型における物語展開と、引力・斥力の構造についてまとめたものが図 3、図 4 である。

	物語展開
(i) 内部収束・融合型	欠乏→遭遇→外発的試練(敵の出現・怪我等)→協働・助け合い→友情の成立
(ii) 外部拡大・融合型	欠乏→遭遇→内発的葛藤(個と集団の利害対立)→集団への適応→友情の成立・拡大
(iii) 内部収束・自律型	交流→内発的葛藤(意見対立)→二者間における相互尊重→友情の確認
(iv) 外部拡大・自律型	欠乏→遭遇→内発的葛藤(意見対立)→集団における相互尊重→友情の成立・拡大

図 3 各類型の物語展開の特徴

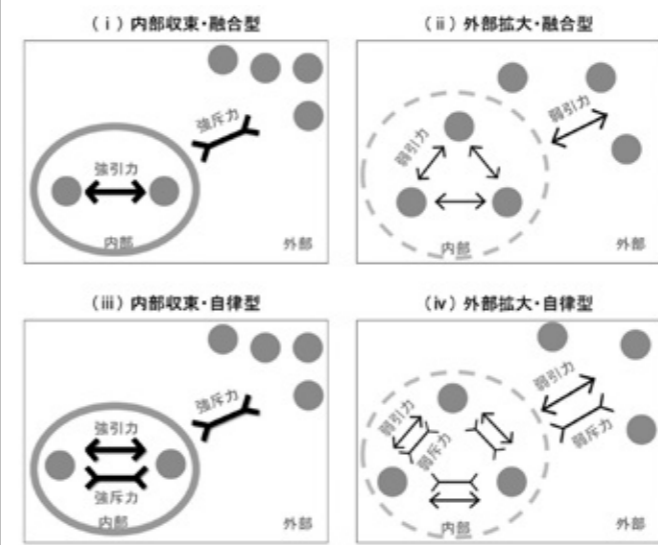


図 4 各類型の内部・外部に対する引力・斥力<sup>14)</sup>

以下、類型ごとに特徴を述べていく。

#### (i) 内部収束・融合型

代表的な物語構造としては、以下のとおりである。まず、友だちのいない主人公が孤独を持て余している時、1 人の他者と出会う。はじめは緊張やぎこちなさが生じるものの、主人公が相手のどちらかが怪我をする・共通の敵が現れるなどの試練に見舞われると、それを 2 人で協力しあって乗り越え、これを通じて一気に親密な仲になり「友情」が成立する。この類型においては、対立項としての外部 (= 友だちでない異質な他者) が意識されることによって、内部 (= 友だちである同質な他者) における同質性が確認・強化され、「友情」が強固になるのである。

次に、「内部」と「外部」に対する姿勢を、「引力」と「斥力」の視点から説明する。まず「内部」について述べると、内部における友だちとの間には、2 人で 1 つでも言うかのように強力な「引力」が働いている。例えば、二者間では徹底的に「同質であること」が志向される。自分の好きなものを相手も好きかどうかを気にしたり (A)、友だちの怒りや悲しみなどの感情に共感し共鳴するさまが描かれる<sup>15)</sup> など、似たような価値観や感情を共有することが親密な二者間において重要となる。また、そういった分身のような存在だからこそ、互いを深く理解しているさまも強調される。「ほんのともだち」ならば「こころがつうじあ」ったり (H)、「かおをみるだけでいまにをかんがえているのかわか」るのである (I)。

加えて、「外部」の友だちでない他者に対しては、徹底的に排除しようとする強力な「斥力」が働く。例えば、『あしたともだち』(J) では、最近付き合いが悪くなった友だちのオオカミに対して、キツネは焦燥感をあらわにする。「ぼくのほかにもいいともだちができたの?」「ほ、ほかに! そんなことはない!」「だったら、あしたはゆうがたまであそんでくれる? オオカミさん!」。この会話からは、相手が自分以外の友だち (= 「外部」の他者) を持つことは許されないというような拘束的な関係が窺える。また他の絵本に

も、主人公が友だちに対し「きみはぼくのたったひとりのともだちだよ」(D) と語るなど、「外部」に友だちはいないこと、そして「内部」における友だちこそが最重要であることが示唆される。

このように、同質性を基盤とした「内部」における強い「引力」と、「外部」の徹底排除という強い「斥力」が同時に存在することが、内部収束・融合型の特徴である。

#### (ii) 外部拡大・融合型

代表的な物語構造としては、以下のとおりである。はじめは集団になかなか馴染めなっていた主人公が、他者と出会い、遊びの誘いの拒否やおもちゃの取り合いなどの軋轢が生じる。やがて主人公は多くの他者とうまくやっていくためのルールや社会規範などを学び、自己変革を経て周りに受容され、そして友だちを増やしていく。この類型では、個と集団の利害対立をきっかけに、個々人が集団に適応・社会化していく過程が描かれる。そうして集団ルールに従う中で友だちの同質性が担保され、その同質性の引力によって外部にまで「友情」が拡大されていくのである。ここにおいては、内部収束型とは違い「外部」を排除するのではなく、「みんなともだち」というように全ての他者を友情空間に包摂することが目指される。

次に、「内部」と「外部」に対する姿勢を、「引力」と「斥力」の視点から説明する。まず「内部」においては、皆で同質的・協調的に遊ぶことが志向されるという点で、「引力」が働いている。『ともだちいいな』(K) では、ボールを独り占めして遊んでいた主人公が、他者との関係を通じてボールを譲りあう、喧嘩をしたら素直に謝るなどの協調性を身につけ、最後は「みんなであそぶとたのしいね!」と言いながら楽しく集団で遊ぶ様子が描かれる。また『ともだちいっぱい』(F) では、友だちの好きなものを皆で共有しながら、集団で同じ遊びをし手をつないで「ひとつ」になる様子が描かれる。このように、「友情」が取り結ばれる集団内においては、皆が同じものを好きで同じ行動をするといった同質性・凝集性が前提となっている。

「外部」に対しても、同じく「引力」が働いている。『ともだちいっぱい』(H) には、「ともだちのともだちは、ともだち!」を合言葉にして無制限に友だちを増やしていく描写がある。自分に直接的関係のない他者にまで友情の範囲を広げ、「みんないっしょ」であろうとするために、ひとつのものとして引き付け合う「引力」が作用するのである。ここにおける「外部」は、「友だちではない異質な他者」ではなく、「友だちになりうる同質な他者」のいる世界として想定される。

このように、集団ルールに従う中で「内部」において友だちとの同質性が確認され、「外部」の他者にもその同質性を広げていこうとする志向がこの類型の特徴である。これは、ある意味自己と他者が未分化であるとも表現できる。

#### (iii) 内部収束・自律型

代表的な物語構造としては、以下のとおりである。友だち同士で仲良く暮らしていたところ、ある日友だちが旅に出るなど離れ離れになることを迫られる。主人公は、友だちの生活や意思は自分とは

違うものであることを受容し、自分の感情を身勝手に押し付けることを控え、友だちの意思を尊重するようになる。こうして、互いにより深まった「友情」を確認しあう。この類型においては、意見対立といった２者間における異質性の確認とその尊重こそが「友情」の軸となっている。外部（＝友だちでない異質な他者）はそもそも意識されず、内部（＝友だちである異質な他者）にのみ目が向けられ、互いの異質性を尊重し合うことを通してより親密になるのである。

次に、「内部」と「外部」に対する姿勢を、「引力」と「斥力」の視点から説明する。まず「内部」について述べると、強い「引力」と「斥力」の釣り合いのとれた状態といえる。互いに情愛や信頼といった情緒的な結びつきが描かれるという点では「引力」があり、かつ互いを異なる他者として距離を置き尊重しあうという点では「斥力」が見られる。この代表的な例に『ムーミンのともだち』(E)が挙げられる。旅に出ようとするスナフキンの意思を、ムーミンは戸惑いつつも次第に受け入れ尊重する。そして別れの際、スナフキンが友だちのしるしとしてムーミンに以下の歌を贈る。「ぼくのともだちすてきなともだち　いつもいっしょじゃないけれど　あわないうときがあるけれど　そんなときこそおもいだす　とおいときこそちかくなる　ひとりであるからわかるんだ」。ここでは、「いつもいっしょ」に在るといった密着したふれあいは親しさの必要条件にはならず、互いに「ひとりである」時間も尊重しながら、相手を思いあうという「引力」と「斥力」の釣り合いのとれた構図が浮き彫りとなる。また、『メルローズとクロックともだちっていいな』(L)では、一緒に暮らしている友だち同士のイヌとワニが、互いに全く異なる長所や短所を述べながら、最後には「ぼくは好き、いまのままのきみがすき！」と承認しあう様子が描かれている。ここにも、互いは全く異なる他者であるという自覚と、その異質性の尊重が、２者関係において重要な軸となっていることがわかる。

続いて、「外部」に関しては、(i)のパターンと同じく強い「斥力」が働いていると言える。『メルローズとクロックともだちっていいな』(L)において２者間で共に暮らす様子のみが丹念に描かれているように、「外部」の友だちでない他者はそもそも描写されず、終始主人公とその友だちという２者間で世界が完結している。つまり、親密な「内部」に対して「外部」という世界は無意識的に排除されているのである。

このように、「内部」においては互いに異なる他者としての尊敬・尊重を基盤とした「引力」と「斥力」の平衡状態が保たれ、「外部」に対しては排除しようとする「斥力」が働くということがこの類型の特徴である。

(iv) 外部拡大・自律型  
代表的な物語構造としては、以下のとおりである。ひとりだった主人公が、複数の他者と出会い、考えや趣味嗜好の違いから衝突する。やがて主人公は自己と他者は違うという現実を受け入れ、それぞれの個性を尊重するようになり、友だちを増やしていく。この類型では、(ii) 外部拡大・融合型のように個が集団のルールに適応することで同質化していくのではなく、集団内における個と個がそ

れぞれの異質性と向き合い、そしてそれを受容・尊重することによって「友情」が形成される。そしてその「友情」の対象は外部（＝友だちになりうる異質な他者）へと広げられていくのである。

次に、「内部」と「外部」に対する姿勢を、「引力」と「斥力」の視点から説明する。まず「内部」の友だちの間では、「引力」と「斥力」が均衡している。集団として仲良く共存することを目指す点では緩やかな「引力」が存在するが、一方で個と個は同質ではなくそれぞれ全く違う個性を持った他者として距離を置いた見方をしているため、この点では「斥力」が働いているといえる。例えば、『エルマーのともだち』(G)では、主人公である象のエルマーは他の象とは違うカラフルな見た目という異質性を持つ。そしてその友だちもライオン、ネズミ、キリンなど多岐にわたり、見た目や性格、特技など全てにおける異質性が強調されながらも、「みんななかよし」であると述べられる。また『と・も・だ・ち』(M)では、はじめ主人公は近所の子もたちと趣味が合わないとして拒否するも、母親に「もしおともだちをつくりたいのなら、あいてのありのままを、だいじにおもってあげなきゃ」と諭されたことを契機に、相手に歩み寄り、相手の価値観を尊重することで自分もまた尊重されるのだということを学んでいく。まとめると、この類型は(ii)のように集団に適合し同質化することで緊密なつながりを担保するのではなく、それぞれが無理に合わせずそのままの違いを尊重しあうことで、ゆるやかに「引力」と「斥力」を釣り合わせ、適度な距離を保ちながら「友情」を成立させているのである。

そして「外部」に対しても、「引力」と「斥力」が同様に釣り合っている。『エルマーのあたらしいともだち』(N)では、主人公エルマーに新しい友だちができたという噂を聞いた友だちが、「エルマーのあたらしいともだちってことは、ぼくらみんなのあたらしいともだちってことだよな？」と述べながら、新しい友だちは自分たちとは違うどんな個性を持っているのかということをしきりに話題にしている。こうして彼らの視線は、内部という「友だちである異質な他者」だけでなく、外部の「友だちになりうる異質な他者」にも同様に向けられているのである。そして内部の友だちに対する姿勢と同じく、外部の他者に対してもその異質性が受容・尊重されている。

このように、内部・外部においてそれぞれ自己と他者が全く異なる他者であることを認め距離を置きながら、全ての他者と弱い引力で均質につながっていくあり方がこの類型の特徴である。しかし違った見方をすれば、このあり方は異質性を受容するようであり、実は他人の領域に深く踏み込むことを回避している儀礼的な関係だとも解釈できる。

## 4. まとめと考察

### 4.1 分析結果のまとめ

今回対象とした絵本における「友情」の描かれ方には、全体的な特徴として以下の点がある。まずは、友だちがいる状態への絶対的肯定と同時に、「ひとり」の状態に対して否定的な価値付けがなされることである。次に、「友情」の物語の登場人物は擬人化された

動物などである場合が圧倒的に多いことが挙げられる。そして、登場人物の性別を明確に描写しない、もしくは男女混合の「友情」を描くなどによってジェンダーによる違いを明確化しないことも明らかとなった。

また、「友情」の関係性のパターンは、(i) 内部収束・融合型、(ii) 外部拡大・融合型、(iii) 内部収束・自律型、(iv) 外部拡大・自律型という四つの類型に分けられた。数を比較すると、内部収束型(計56点)は外部拡大型(計35点)より多く、また融合型(計65点)は自律型(計16点)をはるかに上回った。中でも融合型は、日本作品の中では77%(41点)を占めるのに対し海外作品では63%(24点)にとどまり、日本作品の方が比較的融合型を描く割合が高いことがわかる。とりわけ、日本作品では(ii) 外部拡大・融合型が海外作品に比べ多いことが特徴であった。以上のことから、日本における融合的な「子どもの友情」イメージがうかがえる。また、本稿の分析結果には「大人が『子どもの友情』をどう見ているか」だけでなく、「大人が『友情』自体をどう見ているか」も関わっていると考えられるが、これについては考察で後述する。

### 4.2 考察

以上の分析結果をふまえて、絵本に描かれる「友情」の特徴やその提示の仕方について考察する。

はじめに、登場人物の多くが擬人化された動物や無生物であったこと、またジェンダーレスな「友情」が多く描かれたことに関する意味を述べる。人物を動物や無生物に置き換えることによって、性別や出自など人間における様々なカテゴリーが無効化される。そうすることで、現実には制約されない「友情」の理想や、自由な「友情」の広がりを描くことが可能となるのである。

では、そのような工夫によって描き出された純粋な理想としての「友情」は、どのような意味を持っているのだろうか。絵本の中で美化されて描かれる「友情」の類型と、それぞれの類型がもつ陥穽について検討したい。

まず(i) 内部収束・融合型は、全対象91点中42点を占め、もっとも多い類型であった。これは、２者間において深く親密に交流するという構図が、古くから理想化されてきた「友情」の典型例かつ基本形であるからだろう。実際、親友と呼べるほどの友だちの存在は、子どもの心理面・社会面における発達に大きく関わるといった効用も様々な研究において明らかにされてきた。しかし懸念点としては、内部収束・融合型の志向が、拘束的な圧力を生じさせるおそれがある。「2人で1つ」の状態を理想とすることは、「他に自分より仲の良い友だちを作ってはいけない」「2人の間で隠し事はしてはいけない」という意識につながりやすく、窮屈な息苦しさを内包しうる<sup>16</sup>。

(ii) 外部拡大・融合型は、特に日本作品において多く見られることが特徴であった。これは、子どもに対し、集団にうまく順応してほしいという日本の親や教育者の期待の表れだと言えよう。また、「みんないっしょ」という同質性は、平等性の担保と同時に語られるため、教育や保育の場で受容されやすい<sup>17</sup>ということも推察さ

れる。一方、この類型に含まれる問題点としては、全員が仲良くわかり合う世界において、理解できないレベルの「異質な」他者が想定されていないということである。ここには、理解できる人間しか存在しないというエゴイズムが垣間見られる。また、集団内で全員が親密に仲良くするという理想は、各個人の相性の有無や、友人間での潜在的対立といった現実的な問題を無視しているともいえる。

(iii) 内部収束・自律型は、愛情と尊敬をもって２者間で認め合うという、理想主義的な、成熟した関係である。しかしこれは、外部を無視・排除するからこそ成立する２者間の尊重関係であり、一種のエリート主義的な姿勢にも通ずる。排他的に２者間で尊重しあう構図は、文学的な理想論ではあっても、社会性を育むことを重要視するという教育的な価値観においては受容されにくいのだと考えられる。

(iv) 外部拡大・自律型では、全ての他者が緩やかに均質につながっており、何も排除しない。これは包摂型社会の理念を体現しているようにも思える。しかし実際は、異質性を尊重するよう見えて、他者の領域に深く踏み込むことを回避しているにすぎない儀礼的な関係とも言えるのではないか。現代の分化・表面化したと言われる人間関係の様態を、理想的に変換したものであるとも解釈できる。

これらを合わせて見ると、絵本全体を貫く「友情至上主義」の仕組が見えてくる。友だち絵本は以下２つの特徴をもって、「友情」の価値を称揚している。1点目は、「ひとり」でいることに否定的なイメージを付与し、「友だち」ができることによってハッピーエンドとなる構図を作り出していること。そして1点目は、どの類型にせよ、「友情」を語る際に「隠蔽」しているものがあるということである。先述したように、それぞれの「友情」類型にも様々な陥穽があり、それらが覆い隠されながら、「友情」の素晴らしさが強調されている。

最後に、絵本に表れている大人たちの思いを考察する。今回対象とした絵本においては、融合的で親密な交流や、葛藤をさまざまなかたちで乗り越える様子が描かれたが、ここからは子どもたちの社会化を促す、または対人関係における規律を教えるという教育的ねらいや期待が読み取れた。しかしそれだけでなく、他者との親密なつながりに対する大人の願望や憧憬が、子ども絵本の世界<sup>18</sup>に仮託されていることが考えられる。ここで大人の願望について述べるために、大人の友だち付き合いの現実を少し確認したい。ジンメルは、現代人を複合的・多面的に「分化」した存在であるとし、友人関係も多様に分化するからこそ、親密な関係の中にも「自己顕示と自己抑制」(Simmel 1908=1994: 367)の均衡が必要だと述べる。また清水真木によると、社会における成熟した大人ならば「自分のことを他人に打ち明けたいという欲求」を「引力」と「斥力」のバランスを意識しながらコントロールせねばならず、そこに友だちとの付き合いのジレンマやさびしさがあるという(2005: 174-175)。これらの議論から、現実における現代人の「友だち」との関係性は、基本的に「引力」と「斥力」の釣り合いを必要とする「自律型」の傾向をもつことがわかる<sup>19</sup>。しかしその一方で、絵本においてはその自律型よりもはるかに多く、「引力」によつての

み引き合う「融合型」の関係性が描き出されていた。このことから、子ども絵本の「友情」に、現代の大人の憧憬や願望が映しだされていることが考えられる。「友情」の絶対的価値を掲げながら、自己と他者が容易に「友だち」になりすべて分かり合うさまを描く友だち絵本は、現実の対人関係における配慮や葛藤に日々さらされている大人たちがカタルシスを得るための一種の装置となっているのかもしれない。

以上をすべてまとめると、以下の図5に表すことができる。

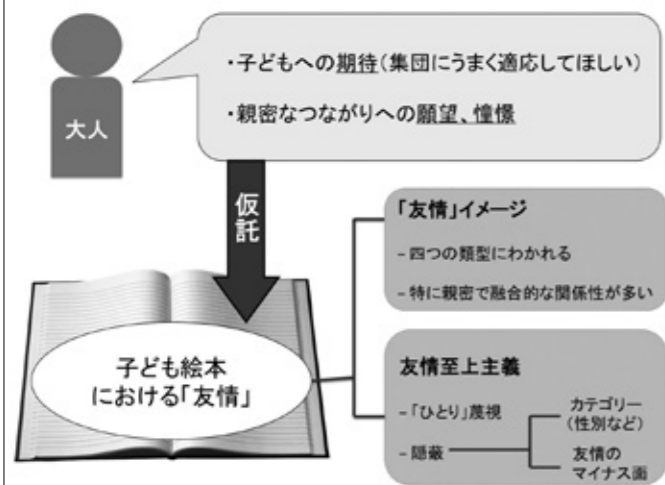


図5 絵本における「友情」の様相

## 5. おわりに

本研究では、①絵本における「友情」のイメージとそれに付随するメッセージを明らかにし、また②そこに反映される大人の側の願望やねらいに迫ることを目的とした。①に関しては、「友情」のあり方について四つのかたちが浮かび上がったが、その中でも特に親密な融合型が圧倒的に多いことがわかった。また、友情至上主義的なメッセージが込められ、それは様々な要素の隠蔽や「ひとり」蔑視によって提示されていることが明らかになった。また②については、集団にうまく適応してほしいと願う日本の親の期待や、親密な絆に対する大人たちのノスタルジアや願望が、無邪気な「子ども」が自他未分化な存在として交わり合う描写の中に仮託されていることが読み取れた。

対象とした資料が限定的であること、また内容解釈も幾らか恣意的にならざるを得ないことなど、分析の精度に関して課題はある。しかし、「つながり」や「絆」に関心が集まる昨今、社会において無条件に肯定されることの多い「友情」のイメージとその語られ方を客観的に見つめなおすことは、これからの友情論や友人関係論などの議論を深めていく上でも有用であると考えられる。

また、今回は2000年代以降の絵本に限定したが、今後はさらに昔の資料にまで遡って、「友情」の描かれ方の経年変化を調べていきたい。加えて、書き手である作家、買い手である親、メッセージを受け取る子どもなど、様々な側面からのより幅広い分析を、今後の課題としたい。

## 〈注〉

1 ただしテンニースは「朋友」について、「肉親および近隣とは無関係に、一つ心の仕事と考え方の条件および結果として、したがって職業あるいは技術の同一と類似によってもっとも容易に与えられる」(Tönnies 1887=1977: 52)と述べている。つまり、テンニースの「朋友」という言葉には、一般的な友人・仲間としての意味だけでなく、宗教や職業を通じた協働者との親密なつながりという意味が含まれている。

2 教育社会学の領域において実際の子ども同士の友人関係を研究したものとしては、住田正樹の研究が挙げられる(住田 2003)。住田は、友だちの有無が子どもの居場所形成や自己イメージ形成に大きく関係していることを明らかにした。

3 絵本・児童文学研究者である香宗我部は、以下のように絵本の重要性を強調している。「絵本は、(中略)未来の社会を構成する者たちへの、現在のおとなたちからのメッセージと捉えることもできる。幼い頃の絵本体験は、大人が想像する以上に、深くこどもの心に残り、時には生涯を左右するほどの大きな力を持っている」(香宗我部・鈴木 2012: 14)。

4 生田美秋によると、絵本の主題には「時代や地域を超えて変わらない普遍的なもの、時代の変化や地域によって変化が生じる場合がある」(生田ほか 2013: 21)が、特に近年は社会の変化に合わせて絵本の主題が多様化してきていると述べている。特に日本の絵本の動向としては、核家族化や地域社会のつながりの希薄化の中において、「現代の子どもの心の悩みの深刻化に呼応していじめや友情を主題とした絵本の出版が活発である」(生田ほか 2013: 18)という。

5 例えば、河合(1998)は、児童文学作家である岩瀬成子の3作品の描写から、子どもの友情において生じうる関係の閉鎖性や屈折した心理を明らかにし、子どもの友情といじめの関連について考察している。また五十嵐(2014)は、内田麟太郎のシリーズ作品を検討し、それらを通じて子どもが対人関係スキルを学ぶうとしているが、その内容は作品論にとどまっている。

6 この図書館は、主に乳幼児の子育て支援の専門図書館として平成11年に開設され、絵本や子育てに関する図書や資料を約2万9000点所蔵している。

7 「友だち絵本」の年代ごとの出版点数の違いに関しては、おもに2つの要素が絡んでいると考えられる。1点目は、こどもみらい館子育て図書館における蔵書の年代的偏りの問題である。この図書館自体が1999年に建てられた比較的新しい施設であるため、70、80年代など開設前の比較的古い絵本よりも、開設後の2000年代以降のものが積極的に選書されていた可能性がある。2点目は、母数となる絵本全体の出版点数の問題である。総務省統計局の平成17-27年度版「日本統計年鑑」(毎日新聞社)「書籍の出版点数」によると、児童書の出版点数は70年代16,672点、80年代25,418点、90年代32,127点、2000年代49,560点、2011年と2012年のみで計9,490点と、右肩上がりに増加していることがわかる。したがって、タイトルに「と

もだち」が含まれる絵本が00年代から多く散見されたことも、この絵本出版点数の全体的な増加によるところが大きい。

8 ただし、本研究の選定方法が含む限界に留意する必要がある。タイトルに「ともだち」を含む絵本のみを選定したことにより、ひとりの状態を肯定的に表現する作品を捕捉しづかったということが考えられる。『オオカミくんはピアニスト』(O)『やっぱりオオカミ』(P)『ひとりぼっちのかえる』(Q)など、人と違うこと、1人であること、安易な社会化を拒むことを肯定的に表現する作品も存在する。

9 動物・無生物において性別を見分ける際は、①一人称や呼び名(「ぼく」「あたし」や「かえるくん」「うさぎちゃん」など)と、②話し方(「～だぜ」や「～だわ」など)③見た目における明らかな性別の区別(スカートを履いているなど)を判断基準とした。また、人間と動物・無生物混合の場合において、表1で「不明」と記したところは、人間の方は性別がわかるものの動物・無生物の方が性別不明であるという場合を表している。

10 中間型の例では、「さくらぐみのおともだち」(R)が挙げられる。個性の違う様々な登場人物たちがそれぞれの違いを認めて集団生活を営んでいるという点では自律型ではあるが、一方で何をすることも「みんな一緒」である点が融合型ともとれる。

11 欧米作品は、主にイギリス、フランス、アメリカ、ドイツ、カナダ、フィンランドから成っている。

12 R・ベネディクトは、日本人の行動や価値観の判断は、常に社会関係の中でとらえられ、周囲の人間や「世間」によって決められる傾向を指摘している(1946=2008)。加えてG・クラークと竹村健一は、欧米などは主義主張や信仰を重んずる「原則関係社会」であるのに対し、日本は身近な共同体における対人関係を重視する「人間関係社会」であると述べている(Clark・竹村 1979)。これらに対しては批判も多くあるが、本稿では、ベネディクトやクラーク・竹村らの説を厳密に検討することが目的ではなく、こういった社会的イメージが通説としてよく語られるという例として紹介するに留める。

13 日本作品・欧米作品比較の分析結果に対し、本稿ではまだ考察を十分に深められていない。今後は、欧米作品の描写の中にもどのような多様性が存在するか、その意味や社会的背景をさらに掘り下げていくことが必要である。また、そもそも日本(東洋)社会・西洋社会という二項対立で文化を議論することがはらむ問題についても深く注意し、論じていきたい。

14 この図では、「斥力」の意味が内部と外部において少し異なっている。内部においては、「尊重」であるが、外部においては「排除」である。

15 例えば、『ころんちゃんのおともだち』(S)では、「ぼくあたまたにきた!」「そりゃそうよ、ぶひー!」(略)「うわーんかなしいよー!」「ほんとだね～ピエ～!」という描写が見られ、登場人物たちが感情を共有しあえることこそが友だちのいい点として述べられている。

16 友情において互いの同質性や近接性を親しさの必要条件として

しまうと、無理に友だちに同調せざるをえなくなったり、友だちが自分以外の人も関係を確立しようとする要求を受け入れないといったことが起こりうる。ジンメルは、「親密な性格をもつ関係の形式的な担い手は身体的・心的な近接であるが、近親関係が同時にまた交替的にも距離と休止をも含むのでなければ、その関係もたちまち魅力を失うばかりか、さらには親密さの内容をも失う」(Simmel 1908=1994: 358)と述べている。また、土井隆義は、子どもや若者が同質の人間で固まる傾向について「ひたすら同質の類友だけとつながっている日常は、意外性による刺激を受けることがありませんから、徐々に活気を失って空気が凝んで」くるといい、「今日のいじめの多くは、異質な人間を排除しようとするものではなく、(中略)同質な人間どうしによる常時接続の息苦しさで風穴を開けようとするもの」だとし、同質的で近接な関係の危険性を指摘している(土井 2009: 20-21)。

17 「友情」によって皆がつながるといふ物語は、特に小中の教育現場でのいじめ問題への解決の1つとしても提示されることが多い。ある中学校の「いじめゼロ集会」を取り上げた新聞記事には、いじめを減らす方策として「みんな友だちになる」などの意見が出された様子が書かれている(『読売新聞』2008年6月13日朝刊30面)。またいじめ防止策について話し合う小中学生の集いに関する記事では、「私たちはひとりぼっちをつくらず、一人一人の友達を大切にします」と全員で宣言する様子がある(『読売新聞』2002年7月5日朝刊32面)。「友情」が「いじめ」と対局のものとして提示されることは興味深い。しかし、「いじめ」は「友情」の中においてこそ生じうることは忘れてはならない。「友情」や「友だち」に付随した肯定的なイメージを利用することで、問題への対処から遠ざかってしまうことを自覚すべきであろう。

18 子ども絵本については、大正期の口マン主義の流れのもとでつくられた子ども向けの本と、今回扱っている絵本とで性質の違いがあることに留意したい。河原和枝(1998)は、大正期の児童雑誌『赤い鳥』において、一人ぼっちで弱く寂しい子どもがもつ優しさ・繊細さの描写に着目し、そこに託された大人の「癒し」を見出した。一方、今回分析対象とした「ともだち絵本」は、コミュニケーション能力に富んだ明るく朗らかな子どもが描かれる。ここから、「ともだち絵本」は、『赤い鳥』のようなノスタルジア(過去志向、現実退却)志向ではなく、現実的適応志向であるといえる。

19 ここで、ジンメルの主張と本研究とでは時代的隔りがあることは留意する必要がある。しかし、土井隆義(2009)や本田由紀らの調査(2011)などにおいても、友だちと一定の距離感を保つことに注意を払うという現代の対人関係の特徴が指摘されている。この点で、ジンメルの主張と現代の対人関係の特徴とで共通性はあるといえよう。例えば、本田(2009)の調査によると、中学生女子においては「仲の良い友だちでも私のことをわかっていない」と感じるや「自分の気持ちと違っていても人が求めるキャラを演じる」といった項目がそれぞれ47.4%、35.6%にも達しており、友だちには自分の心の中を見せないような側面があることが述べられている。

<p>〈引用文献〉</p> <p>Allan, Graham, 1989, Friendship: Developing a sociological Perspective. Harvester Wheatsheaf. (=1993, 仲村祥一・細辻恵子訳『友情の社会学』世界思想社.)</p> <p>Ariès, Philippe, 1960, <i>L'enfant et la vie familiale sous l'Ancien régime</i>, Plon. (=1980, 杉山光信・杉山恵美子訳『〈子供〉の誕生——アンシャン・レジム期の子供と家庭生活』みすず書房.)</p> <p>Benedict, Ruth, 1946, <i>The Chrysanthemum and the Sword: Patterns of Japanese Culture</i>, Boston: Houghton Mifflin. (= 2008, 角田安正訳『菊と刀』光文社.)</p> <p>Cicero, 1990, <i>Laelius, On Friendship (Laelivs De Amicitia) &amp; The Dream of Scipio (Somnvm Scipionis)</i>, Warminster. (= 2004, 中務哲郎訳『友情について』岩波書店.)</p> <p>Clark, Gregory・竹村健一, 1979, 『ユニークな日本人』講談社.</p> <p>土井隆義, 2009, 『キャラ化する／される子どもたち』岩波書店.</p> <p>本田由紀編, 2009, 『神奈川県公立中学校の生徒と保護者に関する調査報告書』ベネッセ教育研究総合研究所ホームページ. (2017年2月3日取得, http://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail1.php?id=3204)</p> <p>———, 2011, 『若者の気分 学校の空気』岩波書店.</p> <p>五十嵐沙織, 2014, 『絵本「おれたち、ともだち!」シリーズに見るともだち関係の構築 ―動物たちの気持ちの揺れ動きに子どもは何を感じるか―』『児童文化研究所所報』36: 27–37. 生田美秋, 2013, 「現代の絵本(1) 主題の多様化」生田美秋・石井光恵・藤本朝巳編『ベーシック絵本入門』ミネルヴァ書房, 18–21.</p> <p>石川善樹, 2014, 『友だちの数で寿命はきまる 人との「つながり」が最高の健康法』マガジンハウス. 香宗我部秀幸, 2012, 『絵本とは何か?』</p> <p>Kant, Immanuel, 1797, <i>Die Metaphysik der Sitten</i>. (=2002, 池尾恭一・樽井正義訳『カント全集 11―人倫の形而上学』岩波書店.)</p> <p>香宗我部秀幸・鈴木穂波編『絵本を読むこと』翰林書房.</p> <p>河合麻依子, 1998, 「現代の児童書における友情の一側面 ―いじめについての考察」『東京家政大学博物館紀要』3: 117–134.</p> <p>河原和枝, 1998, 『子ども観の近代 ―『赤い鳥』と『童心』の理想』中央論社.</p> <p>京都市子育て支援総合センター「こどもみらい館の概要」17. http://www.kodomomirai.or.jp/gaiyou.pdf (閲覧日: 2015年11月28日)</p> <p>Lucrece, 1948, <i>De La Nature</i>, par Alfred Ernout, 2 vols. (= 2014, 神崎繁訳『アリストテレス全集 15』岩波書店.)</p> <p>Montaigne, Michel de, 1922, <i>Les Essais de Michel de Montaigne</i>, ed. P. Pierre Villey, Paris,Felix Alcan, 3 vol. (= 1965, 原二郎訳『エッセ(1)』岩波書店.)</p> <p>西出博子, 2009, 『友だちが増える話し方のコツ』学習研究社.</p> <p>親野智可等, 2007, 『「友達力」で決まる! ―子供の人間関係力』を育むために、親にしかできないこと』光文社.</p> <p>Rousseau, Jean-Jacques, 1969, <i>Émile, ou De l' éducation</i>, Oeuvres completes de Jean-Jacques Rousseau, t. VI, Emile, Pleiade. (=1978, 平岡昇訳『ルソー・エミール』河出書房.)</p> <p>清水真木, 2005, 『友情を疑う』中公新書.</p> <p>Simmel, Georg, 1908, <i>Soziologie: Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaftung</i>. Berlin: Duncker &amp; Humblot. (=1994, 居安正訳『社会学 上』白水社.)</p> <p>住田正樹, 2003, 「こどもの『居場所』と対人関係」住田正樹・南博文編『子どもたちの『居場所』と対人的世界の現在』九州大学出版会, 101–168</p>	<p>Tönnies, Ferdinand, 1887, <i>Gemeinschaft und Gesellschaft</i>. (=1957, 杉之原寿一訳『ゲゼルシャフトとグマインシャフト 上』岩波書店.)</p> <p>山名淳, 2012, 『「もじゃペー」にしつけを学ぶ ―日常の「文明化」という悩みごと』東京学芸大学出版会.</p> <p>〈参考文献〉</p> <p>Barthes, Roland, 1966, <i>Introduction a l'analyse structurale des recits</i>, Paris: Seuil. (= 1979, 花輪光訳『物語の構造分析』みすず書房.)</p> <p>土井隆義, 2004, 『「個性」を煽られる子どもたち』岩波書店. ———, 2008, 『友だち地獄』筑摩書房.</p> <p>橋口英俊, 1993, 『人間関係についての相談』ぎょうせい.</p> <p>藤本朝巳, 1999, 『絵本はいかに描かれるか』日本エディタースクール出版部.</p> <p>飯田哲也, 1991, 『テンニース研究』ミネルヴァ書房.</p> <p>菅野仁, 2008, 『友だち幻想』筑摩書房.</p> <p>———, 2003, 『ジンメル・つながりの哲学』日本放送出版協会.</p> <p>Kehily, Mary Jane and Joan Swann, 2003, <i>Children's Cultural Worlds</i>, Chichester: John Wiley &amp; Sons Ltd in association with The Open University.</p> <p>木村涼子, 1999, 『学校文化とジェンダー』勁草書房.</p> <p>Nikolajeva, Maria and Carole Scott, 2006, <i>How Picturebooks Work</i>, New York: Routledge Taylor &amp; Francis Group. (= 2011, 川端有子・南隆太訳『絵本の力学』玉川大学出版部.)</p> <p>奥村隆, 2013, 『反コミュニケーション』弘文堂.</p> <p>小野寺理佳, 2004, 「子ども絵本における祖親性表現」『教育社会学研究』75: 5–23.</p> <p>佐々木宏子, 1993, 『絵本と子どものこころ』JULA 出版局.</p> <p>Spencer, Liz and Ray Pahl, 2006, <i>Rethinking Friendship: Hidden Solidarities Today</i>, Princeton: Princeton University Press.</p> <p>高橋英夫, 2001, 『友情の文学誌』岩波書店.</p> <p>竹内オサム, 2002, 『絵本の表現』久山社.</p> <p>〈文中・注で引用した絵本〉</p> <p>(A) マティアス・イエシュケ, 2010, 『ペーター・プムのともだちさがし』フレーベル館.</p> <p>(B) 柴田愛子, 2004, 『ともだちがほしいの』ポプラ社.</p> <p>(C) 内田麟太郎, 2012, 『ともだちできたよ』文研出版.</p> <p>(D) 原田えいせい, 2013, 『たったひとりのともだち』金の星社.</p> <p>(E) トーベ・ヤンソン・松田素子, 2008, 『ムーミンのともだち』講談社.</p> <p>(F) 新沢としひこ, 2002, 『ともだちいっぱい』ひかりのくに社.</p> <p>(G) デビット・マッキー, 2003, 『エルマーのともだち』BL出版.</p> <p>(H) トッド・パール, 2001, 『ほんとのともだち』フレーベル館.</p> <p>(I) エリック・バトゥー, 2000, 『いつだってともだち』講談社.</p> <p>(J) 内田麟太郎, 2000, 『あしたのともだち』偕成社.</p> <p>(K) いもとようこ, 2002, 『ともだちいいな』岩崎書店.</p> <p>(L) エマ・チチェスター・クラーク, 2006, 『メルローズとクロック ともだちっていいな』評論社.</p> <p>(M) ロブ・ルイス, 2001, 『と・も・だ・ち』評論社.</p> <p>(N) デビット・マッキー, 2004, 『エルマーのあたらしいともだち』BL出版.</p> <p>(O) 石田真理, 2008, 『オオカミくんはピアニスト』文化出版局.</p> <p>(P) 佐々木マキ, 1977, 『やっぱりオオカミ』福音館書店.</p> <p>(Q) 興安, 2011, 『ひとりぼっちのかえる』こぐま社.</p>
--	---

<p>第2回日本絵本研究賞選考委員会委員講評</p>	
<p><b>選考委員長：三宅興子</b></p> <p>このたびの絵本研究賞の審査では、異なった研究方法や多種多様な絵本を対象としている6編の論文を前にして、審査員自らの「絵本の研究とは何か」を問われることとなりました。審査は、論旨、構成、独創性、将来性の4項目の選考基準を得点にした上で、話し合いによって決定しました。それぞれの論文には、研究方法の説得性において、さまざまな問題が指摘されましたが、選ばれたのは、結果的に、将来性と発展性のある論文でした。</p> <p>絵本研究賞に選ばれた磯辺奈々「絵本に描かれる「友情」イメージと友情至上主義の社会学的分析」は、これまでに成立している「論文」としての形式がよく整っており、絵本を対象とした社会学研究の将来性が高い点で抜きんできていました。分析対象となった91点の絵本の抽出方法や絵本の絵についての言及が皆無などの問題点も指摘されました。奨励賞の児玉茜「現代アーティスト元永定正の初期の絵本作品群」は、分析、論拠、基礎知識などに問題があるものの、着眼点のよさと論の将来性が評価されました。</p>	<p><b>選考委員：澤田精一</b></p> <p>絵本を研究するというのは、国内外の絵本を読んでいっても詮のないことで、周辺のさまざまな研究領域の知見を必要とする。受賞論文は、そのような知見を外から持ち込んだ故に受賞し、奨励賞論文は周辺の知見を必要とすることを露わにしての受賞となった。いずれも将来、絵本をしかもこの絵本の絵についての一歩踏み込んだ考察を期待せずにはいられない。なにせ絵である。それを言葉によってどう解析できるか。絵本学の課題である。</p>
<p><b>選考委員：本庄美千代</b></p> <p>今回の選考を終えて、「絵本学」の学際的研究の広がりとその多様性が実感できた。磯辺菜々「絵本に描かれる『友情』イメージと友情至上主義の社会学的分析」は、社会的アプローチからその分析を行った新鮮さと論文としての完成度が評価されたが、論文の展開に「絵の場面」の採用がない点が惜しまれる。児玉茜「現代アーティスト元永定正の初期の絵本作品群」は、さらに掘り下げた作家研究論として今後に期待したい。</p>	
<p><b>選考委員：今井良朗</b></p> <p>それぞれ、絵本が置かれている環境に一石を投じる新たな研究を模索している。磯辺さんは、論点がはっきりしていて分析もしっかりしている。考察の結果、大人の願望や理想が反映しているのではないか、との結論は興味深い。絵で語られているところまで言及してほしいが、次の研究への発展性が期待できる。児玉さんは、絵本の特性に対してもう少し丁寧な分析と論拠がほしいが、絵本制作に至る経緯を絵画作品から俯瞰し、初期の5作品を分析した試みに好感が持てる。</p>	
<p><b>選考委員：駒形克己</b></p> <p>磯辺菜々さんの「友情」を切り口にした展開は新鮮でした。誰もが経験する友だちの存在を絵本から分析し、そこには絵本に込める大人の思いや願望があり、子どもの自立と社会性を促すキーワードがいくつか読み取れました。</p> <p>言葉やストーリーだけでなく、絵が発する情緒的な表現が、子どもたちにどのような影響を及ぼしてきたのか、またするのか、今後に向けての重要な示唆となったのではないだろうか。</p>	<p><b>選考委員：小島明日奈</b></p> <p>本研究賞の審査に関わるのは二度目だが、改めて、特に絵本評論の困難さを実感した。絵本がなぜ子どもの心をぐっとつかむのか。何十回、何百回読んでも、読み飽きることがないのはなぜか。絵や構成、文章や言葉などさまざまな側面から論じることができるはずだが、まだ絵本をまるごととらえる域には至っていないように思う。磯部さんの作品は、今までになかったアプローチが評価された。絵本学会として応募作品増にも取り組んでほしい。</p>

# 2017年度絵本研究会報告



会場のアートホール

テーマ：絵本とメルヘン — 明治学院大学図書館所蔵  
「絵本とメルヘン・コレクション」をめぐる—  
日 時：2017年12月2日(土) 14:00～16:00  
会 場：明治学院大学白金キャンパス アートホール  
講 師：巖谷國士氏(仏文学者、作家、明治学院大学名誉教授)  
司 会：みつじまちこ(絵本学会研究委員)  
主 催：絵本学会  
後 援：明治学院大学図書館  
企 画：本年度研究委員会(本庄美千代、松本育子、みつじまちこ)  
参加者：137名(うち絵本学会員 23名)

2017年度の研究会は、仏文学者・作家の巖谷國士氏(明治学院大学名誉教授)をお招きし、自然とメルヘンを軸に、絵本の歴史的展開とその美しさ・不思議さ・おもしろさについて、広い視野からお話いただきました。明治学院大学の図書館には、ヨーロッパを中心とする約240点の貴重書のコレクション「絵本とメルヘン」があり、現在、図書館では巖谷氏の監修のもと、リストづくりが進められています。今回は、そのなかから40点あまりを選んで、画像を見せながら解説いただくとともに、講演の前後1時間ずつ、図書館に特別展示された同コレクションの鑑賞にあてる、というプログラムで構成しました。

巖谷國士氏といえば、シュルレアリスム研究の第一人者として知られていますが、メルヘンの創作、『完訳ペロー童話集』やアンドレ・フランソワの絵本『わにのみみだ』などの翻訳も手がけています。そして祖父は、日本で最初の創作児童文学作品とされる「こがね丸」(1891年)の巖谷小波です。そんな巖谷氏にとって、絵本

は「懐かしいもの」であるといえます。「すぐれた絵本というものに感ずる、ある種の「懐かしさ」っていうのは、自分が子どものときにそれを読んだから懐かしいっていうんじゃなくて、もっとなにか、個人の枠を超えて、人間が失ったものへのあるせつなさのようなもの、ある種のノスタルジアを含んでいるような気がするんですね」  
その起源は、世界最古の文学作品として知られる『ギルガメシュ叙事詩』にさかのぼるといいます。これは紀元前2600年ごろメソポタミアの粘土板に刻まれてきた楔形文字による作品で、これまでいろいろなかたちで絵本にも描かれてきました。そこには興味ぶかい森の冒険が物語られているのです。「人間はかつて自然のなかにいて、自然のなかから生まれてきたものなだけけれども、どうしても自然をでなきゃならない運命にあったわけです。それは『聖書』にも書いてあることです。自然とは、ひとことといえば森です。われわれは、かつては森のなかに住んでいた。それが、1万年ぐらい前に農耕が発明され、森を伐って森からでて、自然から離れてしまった。それが文明のはじまりで、都市を築いたわけだけれど、また自然に戻ろうとする、この行き来っていうのが、もしかすると、芸術というものの出発点じゃないかな、というふうに思っているんです」  
メルヘンの起源も同様だといえます。ドイツ語の「メルヘン」は単なるお話のことであって、特に口承ではるか昔から伝わっている昔話とか説話のことを、メルヘンというのが本来です。巖谷氏が監修した展覧会「森と芸術」の図録には、メルヘンにまつわる、次のようなくだりがありました。「メルヘンには森がつきものです。(中略)とくに森を舞台にしていないものでも、メルヘンはどこかしら



明治学院大学図書館所蔵  
「絵本とメルヘン」  
コレクションより

森の香気や雰囲気を漂わせていて、そのせいもあるのか、不思議に懐かしいものです」そこには近代的な自我はなく、子どものものでもありません。

「非常に古く、人間が自然をでてから、自然に戻ろうとする衝動があったかもしれないし、その自然っていうものを、むしろ自分の失われたものとして、自分が失ってしまったものとして、懐かしむようなことがはじまった。ぼくらが感じる懐かしさっていうのは、極言すれば、そういうところまで続いているような気がします」

巖谷氏は1943年生まれ。終戦のとき2歳。その巖谷氏の絵本の思い出といえば、当時まだ藝大の学生だった叔父の吉村二三夫氏が、疎開先で描いてくれた『くんちゃんブック』でした。「何よりも忘れられないのは、絵そのものよりも、絵本という物質なんですね。粗末な紙だけれど、表紙はちょっと厚紙で、ごわごわしてて、何度も何度もみてるから、もう汚れちゃうし、よだれは垂れるし、ところどころ噛んだあとがあったりね。この本っていう物質が、なんともいえず懐かしい。それから絵としては、そこらに生えてる木なんかの描写がすごく懐かしい。そんなわけで、子どもの頃の絵本の思い出っていうのは、乏しいものなんです。それにもかかわらず、絵本を見て懐かしいと思うっていったいなんだらうって

うと、メルヘンは文学であり、絵本は美術だけれど、起源としてはおなじで、何か人間にとって決定的に懐かしいもの、つまり、失われたものにつながっているもので、実はそれが子どもにとって、とても必要なことだったと思います」

絵本の歴史にはいくつかの道筋があるけれど、絵本の出発点として、民衆的な起源を考えなくてはいけないと巖谷氏はいいます。「絵本というのはただの本ではない。オブジェだということをわかせてくれる。森の側、自然の側のものである」

その後、民衆版画の流れをくむエビナル版画本から、20世紀のアーティストが手がけた絵本まで、40点あまりの画像を見ながら、具体的に“もうひとつの絵本の歴史”をたどりました。画像で紹介された資料が展示された図書館では、解題付きの展示目録が配布されました。

今回の研究会では、わたしたちがいま、これほどまでに絵本に惹かれ、多くの人が絵本を求めている理由を、古代の森にまで遡って解き明かしていただきました。その後の、図書館資料管理課長、鈴木直子氏の発言ではそのことを裏付けるように、学生を選書のため古書街につれていくと、見たこともないはずの古い和綴じ本を懐かしがる、というエピソードが紹介されました。

(記録：みつじまちこ)



巖谷國士氏



## 選挙管理委員会より

現役員の任期満了にともない、理事選出規則および監事選出規則に従って、2018年2月28日付郵送により来期（2018年度～2020年度）の役員選挙を実施しました。

3月23日必着で投票を締め切り、選挙管理委員会（委員：甲木善久、中川理恵子、西村醇子）にて3月26日に開票作業を行い、以下の結果となりましたことを報告いたします。

### ● 2018年絵本学会役員選挙

投票有権者数：471名

投票数：241名

有効投票数：240名

無効投票数：1名

### 開票結果

〈理事〉

- |            |          |
|------------|----------|
| 1. 藤本 朝巳   | 169票（当選） |
| 2. 生田 美秋   | 165票（当選） |
| 3. 澤田 精一   | 138票（当選） |
| 4. 今田 由香   | 135票（当選） |
| 5. 松本 育子   | 128票（当選） |
| 6. 鈴木 穂波   | 112票（当選） |
| 7. 丸尾 美保   | 104票（当選） |
| 8. 佐々木 由美子 | 103票     |
| 9. 宮崎 詞美   | 79票      |
| 10. 甲斐 聖子  | 66票      |
| 11. 岡野 恵子  | 64票      |
| 12. 辻 政博   | 56票      |

〈監事〉

- |            |          |
|------------|----------|
| 1. 香曾我部 秀幸 | 208票（当選） |
| 2. 千田 篤    | 197票（当選） |

### 今後の予定

4月中旬に理事選挙の当選者7名による新理事会準備会を開催し、会長、事務局長、各専門委員会委員長、会長の任命による理事3名、以上の候補が選出され、6月2日の第21回絵本学会総会の承認を経て正式に新理事会が発足します。

## 紀要編集委員会からのお知らせ

### ● 絵本学会紀要『絵本学』第21号投稿論文募集について

絵本学会紀要『絵本学』第21号への投稿論文を募集します。

ふるってご応募ください。なお、下記投稿規程の他に執筆要項があります。原稿は**必ず執筆要項に従って作成してください**。執筆要項は絵本学会ウェブサイトからダウンロードしてください。あるいは絵本学会事務局にお問い合わせください。

絵本学会研究紀要『絵本学』投稿規程

◎投稿資格：絵本学会会員および準会員

2018年8月31日までに会員資格を有していること。

◎内 容：絵本に関する研究論文、研究ノート、論説、報告で、未発表のもの。

【研究論文】 研究の視点や手法、理論展開及び結論に独創性や説得力が高く認められるもの

【研究ノート】 研究の基礎データになる資料、あるいは理論構築の可能性が認められるもの

【論説】 学術的な論で、注目すべき研究・作品・作家・展覧会・活動を取り上げての評論など

【報告】 活動紹介や文献紹介など

●掲載採択： 査読に基づき、編集委員が掲載の採否を決定する。必要に応じて編集委員の外に査読委員を依頼する場合がある。採否判定の過程・理由は開示しない。ただし、投稿者は、結果について説明を求めることができる。この場合、編集委員会は申し出の内容を精査の上、適正範囲内で回答する。

●執筆要項： 執筆は別に定める執筆要項に従うこと。

●投稿締切： 2018年9月30日（必着）

●採択通知： 2018年12月15日までに投稿者へ通知する。

●刊行： 2018年度内

●原稿送付先： 絵本学会事務局（郵送とする。FAX、電子メールなどによる送付は不可）

〈文章量への注意〉

絵本学会紀要『絵本学』へ投稿を希望される方は、執筆要項をよく読んで、原稿を作成して下さい。特に、文章量にはご注意ください。絵本学会紀要『絵本学』は第1号以来、同じ書式で作成しています。現在の紀要のページ割では、註・引用文献・参考文献を含め、研究論文は8ページ、研究ノートは6ページ、論説と報告は4ページを原則とします。このうち、はじめの左半ページは、表題、執筆者名、専門分野、和文・英文抄録等の記載に使用します。本文は右半ページからはじめます。

## 絵本学会理事会報告

### ● 2017年度 第3回絵本学会理事会 議事録

日 時：2017年10月1日（日）14:00 –

会 場：東京工芸大学中野キャンパス2号館3階アトリエ2

出席者：松本猛（会長） 陶山恵（事務局長） 生田美秋 澤田精一  
永田桂子 本庄美千代 松本育子 村上康成 和田直人

委 任：佐藤博一

### 議事次第

○報告事項

#### 1. 会長より

松本会長より、2017年度第3回理事会の開催挨拶があった。

#### 2. 前回（2017年度第2回絵本学会理事会）議事録の確認

第3回絵本学会理事会議事録の確認があり、承認された。

#### 3. 各委員会報告

1) 企画委員会

2017年12月16日（土）開催予定の絵本学会フォーラム2017の開催概要について報告された。

2) 紀要編集委員会

ウェブサイト上に紀要第14号以降の目次を掲載したことが報告された。

紀要第20号掲載の「2017年度絵本研究参考文献目録」の作成を「北海道えほん研究会」（代表／杉浦篤子、6名）に、「2017年絵本原画展・絵本画家展リスト」の作成を竹迫祐子氏にそれぞれ依頼し、受諾されたことが報告された。

依頼原稿「海外文献」については、可能な担当者を探していることが報告された。献本についての事務局対応について確認があった。

紀要第20号の年内スケジュールについて報告された。

3) 機関誌編集委員会

特になし。

4) 研究委員会

12月2日（土）開催予定の研究会の開催概要について報告された。

5) 広報委員会

特になし。

6) 特別委員会（日本絵本研究賞）

第2回日本絵本研究賞の運営進捗状況について報告された。

#### 4. 事務局より

特になし。

#### 5. 「フォーラム 子どもたちの未来のために」について

澤田理事より、10月6日（金）開催予定の「共謀罪と表現の自由」（於：日本出版クラブ 登壇：黒澤いつき、ドリアン助川、森枝卓士）について報告された。

#### 6. 第20回絵本学会大会（2017年度）について

藤本大会実行委員長より報告書が提出されたが、必要な内容を整えて再度報告を受けることとなった。

#### 7. 第21回絵本学会大会（2018年度）について

松本会長、松本育子大会担当理事より8月に会場視察と打ち合わせが行われたことが報告された。

#### 8. その他

特になし。

○ 審議事項

#### 1. 入退会者について（6月26日～9月30日）

入会者および退会者について審議され、承認された。

入会者：宮川晴美、若林みずほ、来栖史江、小泉直美、柏木昭江、林ショウイン、高橋真生、馬見塚昭久、山田則子、佐藤未央、新井紀子  
計11名

退会者：芳賀雅子、倉持佳代子、毛利まさみち

計3名

#### 2. 事務局より

特になし。

#### 3. 各委員会報告

1) 企画委員会

特になし。

2) 紀要編集委員会

特になし。

3) 機関誌編集委員会

「絵本 BOOKEND 2018」の編集について方針とページ構成（予定）が提案され、改善点が検討されたほか、特集記事等について審議が行われた。

4) 研究委員会

特になし。

5) 広報委員会

学会ニュース No.59 発行の計画について審議され、発行日の確認およびメールニュースの発行スケジュールについて承認された。

6) 特別委員会（日本絵本研究賞）

日本絵本研究賞に関わる学会会則の変更、条文追加について文言の整理が行われ、審議の後に「附則 本規則は、平成29年9月18日より施行する」とする日本絵本研究賞選考規則が承認された。

#### 4. 絵本学会20周年記念事業について

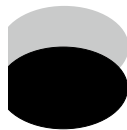
出版事業について、進捗状況が確認され、継続審議となった。「絵本学会20年史」について、進捗状況が確認され、継続審議となった。

#### 5. 次期理事選挙について

日程の確認がなされ、継続審議となった。

<p><b>6. 日本学術会議協力学術研究団体への登録について</b> 継続審議となった。</p> <p><b>7. その他</b> 特になし。</p> <p><b>● 2017年度 第4回絵本学会理事会 議事録</b> 日 時：2017年12月17日(日) 14:00 – 18:00 会 場：東京工芸大学中野キャンパス2号館3階アトリエ2 出席者：松本猛(会長) 陶山恵(事務局長) 澤田精一 永田桂子 本庄美千代 松本育子 和田直人 杉浦篤子(第21回大会関連の審議事項のみ) 委 任：生田美秋 佐藤博一 村上康成</p> <p><b>議事次第</b> ○報告事項 <b>1. 会長より</b> 松本会長より、2017年度第4回理事会の開催挨拶があった。</p> <p><b>2. 前回(2017年度第3回絵本学会理事会) 議事録の確認</b> 第3回絵本学会理事会議事録の確認があり、承認された。</p> <p><b>3. 各委員会報告</b> 1) 企画委員会 2017年12月9日(土)に開催された絵本学会フォーラム2017「ブルーノ・ムナーリ～絵本と美術教育～」について報告された。 講師：岩崎清、会場：日本女子大学目白キャンパス新泉山館2階、14:00～16:00、参加者：会員24名、一般59名、合計83名であったことが報告された。 2) 紀要編集委員会 紀要「絵本学」20号発行について、進捗状況が報告された。投稿は9編(論文として8編、ノートとして1編)を受領、査読委員会にて再提出再審査も含め論文として4編、ノートとして2編、論説として1編を掲載する予定とし、作業を進めている旨が報告された。 学会ウェブサイト上の紀要目次の誤りについて指摘を受け、訂正を広報委員会に報告し、修正されたことが報告された。 「絵本 BOOKEND」掲載の紀要目次の誤りについて指摘を受け、機関誌編集委員会に報告し、修正を依頼することが報告された。 3) 機関誌編集委員会 「絵本 BOOKEND 2018」発行について、編集・発行の計画が報告された。 4) 研究委員会 2017年12月2日(土)に開催された2017年度研究会「絵本とメルヘン ー明治学院大学図書館所蔵『絵本とメルヘン・コレクション』をめぐってー」について報告された。講師：巖谷國土、会場：明治学院白金キャンパスアートホール、14:00～16:00、参加者：会員23名、一般114名、合計137名であったことが報告された。</p>	<p>5) 広報委員会 学会ニュースNo.59(2017年10月24日付)発行およびメールニュース(5、6号)配信の件について報告された。 6) 特別委員会(日本絵本研究賞) 第2回日本絵本研究賞の選考進捗状況について報告された。合計応募者8名、応募論文13件(うち2件は応募条件対象外)であったことが報告された。選考委員による最終選考は2018年2月1日(木)に開催されることが報告された。</p> <p><b>4. 事務局より</b> 特になし。</p> <p><b>5. 「フォーラム 子どもたちの未来のために」について</b> 2017年12月8日(金)に開催された第7回学習会「戦時下のデザインと戦争協力」について報告された。講師：澤田精一、会場：日本出版会館 18:00～20:00。また、次回学習会「戦時下の紙芝居」(講師：酒井京子、2018年3月9日(金)会場：童心社 18:00～)が開催されることが報告された。</p> <p><b>6. その他</b> 特になし。</p> <p>○審議事項 <b>1. 入退会者について(10月1日～12月16日)</b> 入会者および退会者について審議され、承認された。 入会者：浅井忍、増山由香里、藤安代、住吉美智子、後藤良子 計5名 退会者：日名子孝三、神戸洋子 計2名</p> <p><b>2. 事務局より</b> 第20回絵本学会大会(2017年度)について、大会報告に不足があること、学会大会印の返却が行われていないことが報告され、大会担当理事より状況の是正が諮られることが審議され承認された。</p> <p><b>3. 各委員会より</b> 1) 企画委員会 特になし。 2) 紀要編集委員会 特になし。 3) 機関誌編集委員会 特になし。 4) 研究委員会 特になし。 5) 広報委員会 特になし。 6) 特別委員会(日本絵本研究賞) 今後の日本絵本研究賞の運営について審議され、次年度以降も継続して進めることが承認された。</p>
--	---

<p><b>4. 第21回絵本学会大会(2018年度)について</b> 第21回絵本学会大会の開催概要が提出され、大会テーマを「多様化する絵本」とすること、基調講演をあべ弘士氏に依頼、ラウンドテーブルは、A・絵本表現野多様化と保育現場、B・いわさきちひろ生誕100年 武市八十雄、C・未定、その他「ふきのとう文庫」による展示企画を行うこと等が審議され、承認された。開催日程およびタイムスケジュールが検討された。</p> <p><b>5. 第22回絵本学会大会(2019年度)について</b> 開催会場について話し合われた。</p> <p><b>6. 絵本学会20周年記念事業について</b> 出版事業について、継続審議となった。 冊子「絵本学会20年史」は、今年度中に発行予定であることが確認され、承認された。</p> <p><b>7. 次期役員選挙について</b> 役員候補者について話し合われた。</p> <p><b>8. 日本学術会議協力学術研究団体登録について</b> 作業進捗状況が報告された。</p>	<p><b>9. その他</b> 特になし。</p> <p><b>● 2017年度 絵本学会臨時理事会 議事録</b> 日 時：2018年1月24日(日) 14:00 – 会 場：東京工芸大学中野キャンパス2号館3階アトリエ2 出席者：松本猛(会長) 陶山恵(事務局長) 生田美秋 澤田精一 永田桂子 本庄美千代 松本育子 村上康成 和田直人 委 任：佐藤博一</p> <p><b>議事次第</b> ○審議事項 <b>次期役員選挙について</b> 次期役員選挙、理事・監事候補者選出について話し合われた。</p> <p>次回理事会 2018年3月25日(日) 14:00～ 東京工芸大学中野キャンパス2号館3階アトリエ2</p>



絵本学会